

臨床判断 ティーチングメソッド

三浦友理子・奥裕美＝著
2860円(本体2600円＋税10%)
医学書院 ☎03-3817-5600



臨床に身を置きながら教育に携わる人が 「待っていた」本

ウィル訪問看護ステーション江戸川所長 岩本大希

結論から書くと、「私はこんな本を待っていた」。臨床で学習者を支援する管理者やプリセプター、またはエルダーにあたる臨床家で教育に関わる人々には、本書をお薦めしたい。臨床に身を置

きながら、半径数メートルの人々の学習・教育に携わる人こそ、「こういうふうに進めたかったのだ」と思うヒントが随所に散りばめられているはずだからだ。私自身、本書を参考にしながら、自組織の教育について新たな組み立てをしたいと考えている。

新人と先輩との解釈の違いも明らかに

本書は大きく3部構成となっている。個人的には2部と3部をお薦めしたい。2部はプリセプターや教育担当など行う中堅の訪問看護師たちに特に薦められる。「そもそも臨床判断能力とは何か」についてタナーの臨床判断モデルをもとにした説明から始まり、実際に教育していく上で参考になる事例およびフレキションの具体的な方法、

そしてラサターのループリックを使った評価項目までを網羅。さらに実習や現場で使える帳票まで用意しており、気が利いている。訪問看護実践の場は利用者にまつわる情報が豊富すぎることもあり、新人看護師が「先輩看護師が何に気付く、解釈をして介入につなげているのか」についてそばで見ているだけではよく分からないことがある。そうした暗黙知は、丁寧に言語化することもあるだろうが、日常的にうまく伝えられないことも多々ある。タナーの臨床判断モデルは、そうした新人と先輩の気付きや解釈の違いを明確にしている。これらの点は、新人看護師の訪問に同行し、振り返りを行うときに真価を発揮する。新人がつまずくのはどの段階なのかに関しても、本書をもとに考えると先輩看護師は「楽になる」感覚が得られると思う(実際に私はそう感じた)。

なお、「臨床判断能力を育成する」という大きな取り組みに尻込みする方もいるかもしれない。現場派の私としては、とりあえずこのモデルを使って振り返りを行うことが、最初の一步として適切ではないかと考える。もし

併せて具体的な評価を行いたければ、ラサターのループリックを併用すればよいだろう。
実務につながる

第3部は学びのデザインに関連したテーマである。第2部が中堅看護師向けだとすれば、3部は管理者や教育部・看護部など管理職向けだろう。1〜2部を踏まえ、臨床判断能力を育む「仕組み」の構築に関する話だからだ。背骨となる理論、参考にすべきモデル、それを踏まえて研修や学習システムを構築するときに活かせる示唆が豊富に示されている。

ここでも気の利いていることに、すぐに取り入れられるような研修の技術的な方法——目的目標の書き方のサンプル、アクティブラーニングスキルメソッド、研修のスケジューリングやスライドデザインまで——が収載されている。ほぼそのまま取り入れ、すぐにも取り掛かることが可能なのだ。管理者や教育デザイナーを担う統括部署・看護部にとっては垂涎の内容なのではないかと感じる。

＊

本書の特徴は、理論やモデルの紹介に留まらず、読んだ人の「実践」、つまり実務につながることにとにかくこだわり抜かれている点にある。だからこそ、日々忙しい臨床実践および教育に身を置く人間にとって「こういう本を待っていた」と感じられるのだと思う。本書は、臨床教育のアップデートの実現可能性を高めてくれる。